北海道通信　平成２６年１０月２８日（火）

CSR&コンプライアンス研修会

市場原理の中で優位性を

北大・小磯特任教授が講演

札建協

一般社団法人札幌建設業協会（岩田圭剛会長）は二十七日、道建設会館でCSR&コンプライアンスに関する研修会を開催した。会員企業の担当者ら約九十人を前に、北大公共政策大学院の小磯修二特任教授＝写真＝が「地域とともに生きる建設業」と題し講演。建設業がもつものづくりの醍醐味、経済・雇用を支える役割を客観的に示した上で、「市場原理が働く産業としての建設業を理解し、地域に精通しているという優位性を発揮するための努力を」と訴えた。

冒頭、坂敏弘総務委員長があいさつ。建設業が果たすべき役割と使命にふれながら「これからの経営に役立ててほしい」と、研修会の成果に期待を寄せた。

小磯氏は、道建協から受託した調査事業で出版した近著の内容をもとに、独自の観点から建設業の現状と今後の方向性を説明した。

人材不足の問題について、建設業のイメージがよくない現状を示し、「しっかり向き合うことが必要」と指摘。一方で、きちんとした考察や研究がない中で、公共事業とともに批判や不要論が展開されているとした。

その上で、ものづくりが建設業の醍醐味とし、「創意工夫し、日々の生活で目にするもの、まちなみの光景をつくりあげているのが建設業」と説明。そうした観点で産業政策を進めていく必要性を強調するとともに、「受け身ではなく、創造力を高めていくノウハウをもって、競争力を発揮していくことが重要」と訴えた。

また、具体的なデータをもとに建設業が地域の雇用を支えていることを説明し、「地域経済に貢献する産業としてプライドをもってほしい」と要請。同時に「有望な市場と判断すれば、他の産業からも進出してくる」とし、市場原理の中で生き抜いていくという意識の重要性も説いた。

CSRとのかかわりでも「社会に対し何ができるかということだが、地域に最も近いのが建設業」とし、その優位性を競争の中で発揮していくよう呼びかけた。

北海道建設新聞　平成２６年１０月２８日（火）

小磯特任教授が講演

札幌建協

建設業の意義強調

ＣＳＲと法令順守研修

札幌建設業協会は27日、道建設会館でCSR（企業の社会的責任）＆コンプライアンス研修会を開き、北大大学院の小磯修二特任教授が「地域とともに生きる建設業」と題して講演した。小磯氏は建設業を「最大の地域づくり産業」と評価し、地域社会に果たしてきた役割を解説した。

会員企業などから90人が参加。演題と同名の著書を8月に出版した小磯氏は、建設業の人材問題について「人材問題と世間のイメージは深い関わりがあり、自動車産業に良いイメージを持つ人は55％もいるが、建設業は7％にすぎない。従事者も良く思っていない」と根深さを示した。

建設業を考察する過去の書籍を振り返り「批判的論調か情緒的賛美しかない。突き詰めると、建設業の存在が無駄な公共事業論にすり替わっている」と断じつつ、請負産業ながらも競争から創意工夫を生み出してきたことが仕事の醍醐味（だいごみ）になっているとし、その誇りを世間に伝えていくよう激励した。

地域経済の中核とした理由については「地域に雇用を生む。平成に入り他産業が人員を削減する中、建設業は雇用を守ってきた。同じインフラ産業でも電気・ガスは月額給与が平均52万円なのに建設業は33万円にとどまっている」と明かした。

公共事業不要論が飛び交うが「地域経済にとって建設業の投資活動は極めて効果的だ」と一蹴。「地域に密着する運命共同体であり、災害時の役割は特質的。地域との信頼関係に企業価値がある」と存在意義を強調した。

地域と建設業の密接な関わりを説く小磯特任教授